
生徒会のつくりかた！

睦月 尚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

生徒会のつくりかた！

【Nコード】

N4462W

【作者名】

睦月 尚

【あらすじ】

「……どうしてこうなった」

理想の高校ライフ（有り体に言えば、女子との甘酸っぱい日々を送ろう作戦）を夢見て星宮高校に入学した俺。その矢先、一人の美少女（ただし言動が多少アレ）によってはやくもそれは崩されそうになる。さらには一緒に生徒会を作るなんて面倒ごとにまで巻き込まれて……。でもそんな彼女はどこか見覚えがあるような、ないような。ていうか、俺の高校ライフどうなるんだろ……はあ。

一章『第一印象って大事だよね』

——四月某日。

星宮高校正門。

……どうしてこうなった

同じ言葉が繰り返し頭の中を駆け巡る。

帰路に着こうという人を遮るように、校門に出来た人ばかり。その中心には一人の少年と一人の少女。

……まあ、片方は俺なんだが。先ほどから俺に突き刺さるのは、周囲の人間から惜しみなく寄せられる、視線。視線。視線。好奇心のものから侮蔑のものまで、実に様々である。

別段、俺が何か特異な格好をしているとかそういうワケではない。自分で言うのもなんだが、いたって普通だ。

では何故こんな状況になっているのか。

その答えというか、元凶は消去法……するまでもなく、この少女の方である。

あるうことか、この少女、大勢の前で、しかも校門で（この場合場所関係ない気もするが）、俺に対して土下座をしているのだ。

勿論、俺がさせたワケではないことはここに明言しておく。

いや、ホント、どうしてこうなったんだろう……。

ピリリリリ

枕元で鳴り響く携帯のアラームで俺は目を覚ます。

とりあえず体は起こしたものの、低血圧の俺はしばしの間、虚空の一点を見つめる。それから大きく伸びをしてベッドから出る。

一人暮らしをしているため、朝食はあまりとらない方だ。母親がみたら、健康に悪いだのなんだのと喧しく言われるに違いない。だが生憎、両親とも海外出張中のため、まあ、しょうがないといえましょうがないのである。よって今日も朝食は抜き。

真新しい制服に身を包み、最低限の身支度をすませる。心なしか高揚感をおぼえる。姿見の前で最終確認をし、若干残る眠気をひきずりながらも家を出る。

俺が通う星宮高校は、数年前にできた高校である。公立高校でありながら、自由な校風と私立のそれと変わらない校舎や敷地が人気なのか、年々入学者数が増えているらしい。かく言う俺もその一人だ。

理想の高校ライフを送るにはもってこいの場所なのである。

と、言いつつも過度な期待はご法度である。

理想の高校ライフ「青春を謳歌（主に女子とのね）なんて定義付けてはいるものの、現実はそのなに甘くないだろう。

おおよそ、その手のイベントの発生場所の代表格ともいえる屋上は昨今、封鎖されているのが基本である。美人の教師もしくは保健室の養護教諭がいたり、クラスのかわいい子の率がハンパなかったり、なんて漫画やアニメにありがちな設定もまずないだろう。

期待は半分で押し留めておくのが利口なのである。だって裏切られたときが怖いから。いや、良い意味で裏切られるのは十二分に構わないのだけれど。

そんなことを考えているうちに、星宮高校に到着。ちなみに今日は徒歩だ。さすがに入学式にチャリ通はないだろ。まあ、明日からはチャリ通にする予定。

校門を抜けて敷地内へ。入学試験の時も思ったが、やっぱり広い。広すぎるくらいだ。大学くらいの広さじゃなかるうか。大学見たことないけど。

校庭に植えられた桜は見事なほどに満開で、いかにも「入学式」といった雰囲気漂っている。

辺りを見渡したところ、人が少ない。ポケットから携帯を取り出し、時刻を確認する。画面には八時二十分と表示されていた。

入学式は九時からである。少し早く来すぎたみたいだ。これなら朝飯食べても間に合ったんじゃないだろうか。

しかし来てしまったのだから、今更帰るという選択肢はない。とりあえず、校庭をぶらついて時間つぶしでもしようと踵を反した瞬間、

「っ」絶句。いや別に喋ってはいなかったんだけど。

俺の前方には一人の女の子がいた。腰くらいまである長い黒髪を風になびかせながら、桜を見上げていた。

綺麗だ。瞬間そう思った。それと同時にどこか儚さを感じさせる横顔だった。

俺は何故か目が離せなかった。まるで、何かしらの引力でも働いているかのように。

「ねえ。こんなところで突っ立って、何やってんの？」

突然後ろから声をかけられた。振り返ると、二人の女の子がいた。一人はポニーテールで、もう一人は長さは肩口までだが前髪で目を隠している。

「いや、何も。ぼーっとしてただけ」

綺麗な女の子に見惚れてました、なんて言えるわけがない。とりあえず、何事もなかったかのように平静を装って答える。

「ふーん。カワイイ女の子をじいっと見つめてたから、何かやさかすのかなって思って、つい声かけちゃったよ」

ポニーテールの方が不敵な笑みを浮かべながら言う。

「……………」

見られていた。それはもうバツチリと。どう返したらいいのかわからん。

「ま、それはいいとして。君も新入生でしょ？名前なんていうの？」

君も、ってことは、この子たちも新入生なのだろう。まあ、新品の制服着て、入学式に来てるんだから当たり前か。ていうか、他人に名前を聞くときは自分から名乗るのが普通じゃないか？……ま、どうでもいいか。

「俺は白石明だ。よろしく」

当社比三割増しの爽やかさを意識しての挨拶。やつといてアレだが至極どうでもいい気がする。

「明くんね。ちなみに私の名前は教えない」

「何故に！？」

「個人情報だからね。慎重に扱わないと」

「俺には言わせたくせに！」

「はははっ、冗談だよ。ちゃんと教えてあげるって。私の名前は、月ヶ瀬鳴。こちらこそよろしくね」

自己紹介をするだけで、これほど疲れたのは初めてだと言いたいところだが、思うだけにしておく。あまり波風は立てないようによろ。

「ところで、その後ろにいるのは……………」 先程からずっと月ヶ瀬鳴の後ろに隠れている、もう一人の女の子を指差して言う。

「ん？これ？ほら遙、明くんがあんたの名前聞きたくてしようがないんだって。自己紹介しな？」

……そこまでは言っていない。ていうか、もう名前言っちゃってる

じゃん。

「……えと、その……つ、月ヶ瀬、遥……です。……よろしく」
依然として体は月ヶ瀬鳴の後ろに隠れたままだが、顔だけ出して自己紹介してきた。恥ずかしがり屋なのだろうか。

「ゴメンねえ。この子シャイでさ。あ、わかってると思うけど、私達双子の姉妹なんだ。だから呼び方は、名字じゃなくて下の名前でよんでくれい」

確かに。名字じゃどっちがどっちかわからないもんな。

「ああ、わかったよ」

「よっしゃ。それじゃ、これからナル&ハルをよろしくどうぞ、明くん」

「こちらこそよろしく。鳴、遥」再度挨拶を交わし自己紹介終了。今思ったが、二人ともかなりの美少女だ。顔立ちは整ってるし、背も女子にしては少し高い方だ、そして胸も（自重）。

そんな彼女達と入学式早々、友達になれたんだからかなりついてるんじゃないか。これは期待値をあげるべきか悩ましいとこだな。

ふと後ろを振り返る。案の定、彼女はいなかった。ま、当たり前か。

「そろそろ会場にいかない？」と、鳴が提案してきたので、再度携帯で時刻を確認する。

八時四十分。

確かにちょうどいい時間になっている。思ったより時間は経っていなかった。もっと長い時間話していた気がするけど、まあ、いいか。

「じゃ、行きますか」

俺は鳴・遥姉妹と共に、会場へと向かった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4462w/>

生徒会のつくりかた！

2011年9月20日03時30分発行